実習入門で学んだこと

教育学部第二類社会系コース　細川和枝
B146415

私たちが教育実習入門を通して学んだことは、3つあります。
①授業を見るときにどこを見るべきか、という観察者としての視点。
②自分が授業をするときの参考となる点はどこか、という授業者としての視点。
③社会科として特有の強みはどこか。

まず一つ目の観察者としての視点から。
私たちは、この授業を受ける前の生徒としてしか社会科の授業を受けていなかったときは、教科書の内容ありきで、授業が構成されていると思っていました。しかし、実際に今回見てきた授業では、授業の目標がまず初めに設定されていて、そこから教師が教材を選び、その目標達成に向けて授業が構成されているのだということがわかりました。
また、その授業のよいところや問題点を見つけ出すために、実際の授業の記録を細かにとっていくことも経験しました。そうすることで、指導案と実際の授業の齟齬を見つけ出すことができ、その後の評議会が有意義なものになるということもわかったので、これからの実習などに生かしていきたいと思います。

次に、二つ目の授業者としての視点について。
こういう視点で授業を見ていくと、その授業のMQに向けて、教師が生徒を発問によってうまく誘導しているということを感じられました。
また、附属の先生方の行われている授業は、今まで私たちが受けてきた社会科の授業…たとえば、受験に向けた穴埋め中心の授業…とは全く異なっていて、より生徒が自立的に考えることの多い授業になっているな、と感じました。
「教師」としての視点から授業を見ていると、そういった生徒の思考を導くため、教師が発問によって一見流れに任せて進んでいるような授業でも、意図的に組み立てられているということを感じました。こうした、意図をもって生徒をうまく誘導し、一時間の授業を構成していく授業構成力を、経験を積んでいく中で私たちも獲得していきたいと思いました。

最後に、三つ目の社会科の特性について
社会科だからこそできることに、まず様々な視点から現代の社会について生徒に考えさせることができる点があると思います。様々な視点、の中には地歴や公民などの社会科の分野にとらわれず、社会科内の他の分野や理科などの他の教科からの視点、また日常生活との関連も含まれます。そういった視点から、生徒の歴史観や社会観の形成に影響を与える

ことができるところが社会科の強みではないでしょうか。
他にも、社会科では、豊富な資料の活用ができる、という特性があります。教師がそれらの中から目標に沿って厳選し、授業に広がりを持たせていました。資料から学ぶことで、生徒が自ら思考することにもつながると思います。

みなさんは、社会科の授業は教科書に沿ってただ穴埋めをしていくようなもので、目標も指導案も関係ない楽なもの、と思っていませんか？
私たちもそう思っていました。しかし、実習入門の授業を通して、社会科の授業ではまず目標が設定されており、そこから授業の内容、授業の展開方法が決められており、今まで思っていたよりも教師自身の技量が試される教科なのだということを感じました。
また、今回授業の観察の仕方を学ぶことができたので、これから先輩の先生方の授業を受けていく中でよい点をたくさん吸収し、自分が授業をする立場になった時にどう教えていくかの参考にしたいと思います。社会科の授業にしかない「よさ」を発揮できるような、自分の目指す社会科授業について、今後また考えていきたいと思いました。